

かとかい通信 第28号



発行日：令和元年9月1日 発行人：かとうファミリークリニック

高齢者の自動車運転について

蝉の大合唱も終わり、朝晩には風が心地よく、虫の音が聞こえるようになってきました。秋はそこまで来ています。

とある患者さんのご家族からご相談がありました(以下、実際の事例を基に若干改変脚色しております)。

86歳のAさんは普段はおひとりで通院されています。その日は珍しく、Aさんと、近所に住む息子さんとお嫁さんが一緒に来院されました。

Dr.：調子はいかがですか？

Aさん：なんも変わらないよ。

お嫁さん：先生、お義父さん、よく車で出かけるんやけど、テレビでも高齢者の事故のニュースも問題になっているので心配です。なんとか言ってやってください。

Aさん：買い物に行くだけやし、いつも通る道だで危ないことなんかないわ。だいいち車で行かにはあ買った物も運べせんし…

息子さん：こないだ車庫の柱にぶつけたやろ。跡が残ってへっこんどったぞ！

Aさん：あれはコチンと触っただけや！

お嫁さん：自転車で行ったら？

息子さん：自転車の方がふらふらして危ないわ

Dr.：難しい問題ですねえ…(認知機能には大きな問題ないので、直ちに運転を差し控えるべきとまでは言えないが…)…一応ね、車というのはタイヤが地面と接している以外には他のモノやヒトに接触してはいけないんですよ～

…

後日

Aさんはいつものスーパーの駐車場で目測を誤り、隣の車に当たってしまいました。そこまでなら小さい事故で済んだはずなのですが、パニックになりアクセルとブレーキがわからなくなってしまい、急発進して店先に突っ込んでしまいました。幸いけが人は出ませんでした。Aさんはすっかり意気消沈してしまい、いつもの元気さもなくなってしまいました…

誰にも起こりうる話で、大変難しい問題です。大正生まれの私の祖母は、田舎に住んでいても運転免許は持っていないような世代でしたが、現代の80代の方は30年前(1980年代)に50代です。女性の方も大半が運転免許を持っている世代ではないでしょうか。つまり運転ができなくなると、当たり前の生活が成り立たなくなってしまう可能性が大きいのです。

しかし一方で、加齢に伴い身体機能や認知・判断能力は衰えていきます。自動車学校で教官から「運転は認知・判断・操作」と教えられたように、自動車運転にはこの3つの機能の統合がとれている必要があります。「小傷が増えた」というのはこれらの機能低下の兆候なのかもしれません。

さらに求めるなら、想定外の事態や事故にも冷静に対処できる「脳と心の余力」も必要になります。ご家族に「運転を止めろ」と言われていたことが、事故の際に後ろめたい感情を引き起こし、余計パニックになってしまったのかもしれない。

一方ハード面では、電気式シフトレバーやサイドブレーキなど、機能や構造が複雑化していることが、高齢者にとって操作を難しくしている面があるかもしれません。車だけではなく、エアコンはあるのにリモコンで温度調節の仕方がわからなくて熱中症になったとか、トイレの流し方(洗浄ボタン)がわからない、といった事例も経験しています。

誰でも1年に1つずつ平等に歳をとり、確実に老化は進んでいきます。ご本人やご家族がどう受け止めていくか、そして高齢者にも優しい社会環境を整備していくことが、これからの日本には必要なのではないのでしょうか。

一宮市特定健診 後期高齢者健診
がん検診
10月までです。お早めに